「いつか、大人になったけど」

作演出・長野恵美

東郷茶和子（５２）かくたなみ…お一人様！ひとりごともえげつない！

岩鶴浦人（４５）飛田修司…お二人様！初恋からの大人になったよ！

いつか（１２）茶和子のイマジナリーフレンド。無口…当日発表

アダルト（４０）猫っぽい何か。猫にしてはでかい…当日発表

ウォークマン®ケータイＷ５２Ｓ（１４）ナガイタツヲ

【２０２１年夏・茶和子の家・リビング】

茶和子、いつか、アダルトが居る。

茶和子、マスクを着用。通帳(計６冊)を見てニヤニヤしている。

いつか、《イマジナリー》と書かれたマスクを着用。日記を読んでいる。アダルト、《猫》と書かれたマスクを着用。遊んでいる。

茶和子「ひー、ふー、みー、よー、いー、むー、なー、や。ひー、ふー、みー、よー、いー、むー、なー、や。ひー、ふー、みー、よー、いー、むー、なー、や。ひー、ふー、みー、よー、いー、むー、なー、や。ひー、ふー、みー、よー、いー・・・・・ふふふふ。はははは。５００９４３２６円！５００９４３２６円よ５００９４３２６円！あー、これで老後もバッチリね」

茶和子、辺りを見渡す。

茶和子「仕事と投資を頑張って貯めたお金に、中古で購入した、駅近の一軒家。独り身にはちょっと広すぎるけど、私には、イマジナリーフレンドのいつかちゃんと、猫のアダルトが居る。大丈夫。寂しくない。（２人を呼ぶ）いつかー。アダルトー」

いつか、無言で茶和子を見る。アダルト、茶和子に近寄る。

アダルト「にゃー」
茶和子「でかっ！でも可愛いー。あ」

茶和子、くしゃみをする。

アダルト「にゃ」
茶和子「そうだった。私、猫アレルギーだった。だからマスクとかしてたんだった（くしゃみをする）しっしっ。あっちへお行き」
アダルト「にゃ」
茶和子「あと貴方、猫にしてはデカすぎるわ。もっと頑張って」
アダルト「に、にゃー」

アダルト、トボトボとその場を離れ、いつかの傍に座る。
いつか、アダルトを無言で慰める。

茶和子「ふー。ビール飲みたい。ん？」

茶和子、部屋の外に居る浦人から見つめられている事に気づく。
浦人、部屋の中へ入り、《生霊》と書かれたマスクを着用する。

浦人　「好きだーーーーー！！！」
茶和子「きゃーーーーー！！！？」

ウォークマン®ケータイＷ５２Ｓ（以降、ウォーク）ギターを構える。※以降、適宜ギター伴奏。

浦人　「Ｔｕ、Ｔｕ、Ｔｕ、Ｔｕ、Ｔｕ、Ｔｕ・・・・・・」
茶和子「あの、え誰このおっさん？え？ええ？」
浦人　「失礼。この部屋で、一番換気がシッカリしている場所はどちらですか？」
茶和子「あちらですが」
浦人　「あちらですね。ありがとうございます」
茶和子「あの」

浦人、換気扇の下へ。茶和子、いつか、アダルト、怯えている。

茶和子「誰なんですか？」
浦人　「これは、換気扇か」
茶和子「そうですけど」
浦人　「ははは。まるで、貴女と私みたいだ」
茶和子「頭大丈夫ですか？」

浦人、音楽劇風に歌い出す。

浦人　「この声が　聞こえますか？」
茶和子「五月蠅っ」
浦人　「この歌は　届きますか？」
茶和子「届いてますよ」
浦人　「吸い込まれていく私の声　排出される私の恋
　私は　私は　大人になりました」
茶和子「はあ」
浦人　「貴女との出逢いは、４０年前」
茶和子「え、初対面じゃないの？」
浦人　「貴女は私の初恋の人」
茶和子「え、そうなの！？」
浦人　「（セリフ）茶和子お姉ちゃん！僕、お姉ちゃん好き！僕、大人になったら、絶対に、茶和子お姉ちゃんと結婚する！」
茶和子「（セリフ）はっ。大人になったらね・・・・・・え！？」
浦人　「（セリフ）わーいやった！お、大人？大人って、い、いつなれるの？あと何年位？僕は今５歳だから、えーっと、えーっと。えへへ。分かんないや」
茶和子「私、そんな約束」
浦人　「茶和子さん　私は大人になりました　茶和子さん　私は大人になれました　私と一緒に幸せになりましょう　私と一緒の墓に入りましょう」

浦人、バラの花束を茶和子に差し出す。歌、終わり。

浦人　「東郷茶和子さん。私と、結婚してください」

間。

茶和子「えーーーーーー！？」
浦人　「ははっ。可愛い叫び声」
茶和子「キモっ！？え？あの、え？な、何で？」
浦人　「何で？とは？」
茶和子「何で？えっと、あの、全部、何で？」
浦人　「何でと言われましても、私は、あの日の約束を護りに来ただけですよ」
茶和子「と言われても、そんな大昔の事、全然覚えてないし」
浦人　「私は覚えています」
茶和子「私は覚えていない。てか、大人になったらって・・・・・・貴方」
浦人　「岩鶴浦人です」
茶和子「岩鶴さん？は今、おいくつなの？」
浦人　「４５歳です」
茶和子「迎えに来るの遅すぎじゃない？」
浦人　「ははっ。ぬかしおる」
茶和子「イラっ」
浦人　「確かにそうですね。年齢的には、もっと前に迎えに行っても良かった。しかし、これには海よりも深い訳があるのです」
茶和子「はあ」
浦人　「大学を卒業し、無事に就職した私は、早速貴女を迎えに行こうとしました。しかし、気づいてしまったのです。私には、圧倒的に、大人スキルが足りていないという事に」
茶和子「大人スキル？え何それ？」
浦人　「大人スキルは大人スキルです。２０歳を越えれば自動的に大人になれると言うのであれば、知識や教養は、一体何の為にあるのでしょうか？何故子供をまともに育てられない親が後を絶たないのでしょうか？その鍵は、大人スキルにあります。例えば貴女を支える為の経済力」
茶和子「あ、お金なら私」
浦人　「知ってます。現在の貯蓄額５００９４３２６円ですよね？」
茶和子「何で知ってるの！？」
浦人　「すみません。聞こえちゃったので」

茶和子「私の馬鹿」
浦人　「可愛い」
茶和子「キモッ！？あの、だから私、今更結婚は」
浦人　「ちっちっち。結婚のメリットは、お金だけではありませんよ？
　例えば、家事を分担したり」
茶和子「あ、人に洗濯物とか触られるの無理なんで」
浦人　「子育てを」
茶和子「年齢的にちょっと」
浦人　「親の介護を」
茶和子「兄妹で手分けしてやるんで」
浦人　「世間体が」
茶和子「時代遅れすぎよ」
浦人　「老後が」
茶和子「趣味は終活です」
浦人　「一人で寂しい夜も」
茶和子「猫とイマジナリーフレンドが居るんで」
浦人　「ガッテム！」
茶和子「ごめんなさいね。昔から結婚願望とか全く無くて」

浦人、咽び泣く。間。

茶和子「あの」
浦人　「じゃあどうして」
茶和子「え？」
浦人　「どうしてあの時、大人になったらねって言ったのですか？」
茶和子「それは、だから昔すぎて覚えてないって」
浦人　「私はちゃんと覚えている！まるで昨日の事みたいに覚えている！」
茶和子「そうなの。ごめんなさい」
浦人　「いいえ謝らなくて結構ですだって！茶和子さんは私と、結婚する運命にあるのだから」
茶和子「運命？」

浦人、ポケットから謎のカードを取り出す。

茶和子「え何これ？」

浦人　「さっき言いましたよね？大人スキルが足りていなかったって」
茶和子「え言ったっけ？」
浦人　「これが、現時点での私の大人スキルです」

茶和子、カードを見る。

茶和子「年齢４５、レベル１６８、体力２８５、知力４５８、筋力２３０（インナーマッスル特化）、財力３５６、容姿、て何これ？」
浦人　「私の大人スキルカードです。私の大人スキルが表示されています。私の大人スキル値、凄いでしょう？」
茶和子「凄いのかしょぼいのかすら分からない！」
浦人　「ちなみに、香川照之の大人レベルは５３０００００です」
茶和子「だから分からないわよこれじゃ」
浦人　「しゅん」
茶和子「うっわ。言葉でしゅんって言う人初めて見た」
浦人　「こんなもの！！（大人スキルカードを握り潰す）」
茶和子「えー」
浦人　「いいんです。こんなものは所詮おまけです。運命は、私達の味方です。覆りません」
茶和子「味方って。私、貴方と結婚したくないんだけど」
浦人　「大丈夫です。私が一生、茶和子さんを大切にします」
茶和子「別に大切にされ」
浦人　「優しくします。幸せにします。愛し愛され生きるのさ」
茶和子「あの、近い」
浦人　「どーん！！」

浦人、茶和子に壁ドン。

茶和子「ひっ」
浦人　「どーん！どーん！どどーん！！」

浦人、茶和子に壁ドン乱れ打ち。

茶和子「無理無理無理」
浦人　「思い出してください茶和子さん。今すぐ、Ｋｉｓｓ　Ｍｅ」
茶和子「Ｗｏｏ」

浦人　「Ｇｏ　Ａｗａｙ　Ｉ　Ｍｉｓｓ　Ｙｏｕ」
茶和子「アダルトー！」
アダルト「にゃー！」

アダルト、浦人に一撃。効果は抜群だ！

浦人　「ぎゃー！！」
茶和子「アダルト！」
アダルト「にゃ！」
茶和子「ありがとう！でも、今のもあまり猫らしくなかったわ。残念。
（くしゃみをする）」
アダルト「にゃー」
浦人　「くそ・・・・・猫のくせに生意気な・・・・・」
茶和子「この子達に手を出したら、タダじゃおかないから！」
浦人　「この子達？（いつかを見て真顔になる）お姉ちゃん」
茶和子「はい？」
浦人　「・・・・・くくく。ははははははは！くそっ！私も、
茶和子さんに愛されたい・・・・・！（歌う）大好きだ
から　笑って」
茶和子「帰れ！」
浦人　「（泣く）また来ます！」
茶和子「二度と来るな！」
浦人　「大丈夫です。運命ですから。思い出してください。大丈夫で
す。運命ですから。思い出してください」

浦人、泣きながら退場。

茶和子「あー、気持ち悪かった。あ、一応警察に」
いつか「駄目だよ」

間。

茶和子「・・・・・え？」
いつか「警察は、駄目。何の役にも立たない」
茶和子「いつか・・・・・貴女、今、喋ったの？」
いつか「警察は何もしてくれない。いつも大人の言う事しか聞かない」

茶和子「いつか」
いつか「早く、大人になりたいな」
茶和子「大人？」
いつか「大人になったら、私と、茶和子と、アダルトと」
茶和子「私はもう、とっくに大人よ？」
いつか「いつか、きっと・・・・・・」
茶和子「いつか・・・・・・珍しいわね、イマジナリーフレンドの
　貴女がそんなに喋るだなんて」
いつか「・・・・・・」
茶和子「私、どうしちゃったのかしら？さっきまであんなに楽しかっ
　たのに・・・・・まあ、不法侵入してきた変質者に襲われ
　そうになったんだから、仕方がないか。仕方がない。仕方が
　ない」
いつか「仕方がないよ。私達、まだ子供なんだから」
茶和子「・・・・・・私はもう、大人よ？」

　アダルト、自動翻訳機（脚本）を手に取り、喋り出す。

アダルト「茶和子、行こう！」
茶和子「うわびっくりした！？もう！だから、急に喋らないでよ猫で
　しょう貴方？（くしゃみをする）」
アダルト「えへへ。ごめんにゃ」
茶和子「申し訳程度に語尾にニャを付けられても」
アダルト「行こう茶和子！」
茶和子「え？」
アダルト「４０年前の茶和子に、逢いに行こう！」
茶和子「そして私は、アダルトと一緒に、旅に出でました」

　ウォーク、旅に行きたくなる様な着メロを奏でる。
　茶和子とアダルト、旅支度をし、列車へ飛び乗る。
　駅員（浦人）登場。過去への列車、発車する。

浦人　「発車しまーす」
茶和子・アダルト「ガタンゴトン、ガタンゴトン」
茶和子「まさか、アダルトもイマジナリー猫だったなんて」
アダルト「黙っててゴメンにゃ」

茶和子「イマジナリーだって分かると、くしゃみも全然したくなくなったわ」

アダルト「思い込みは怖いにゃ」

茶和子「でも、プラシーボ効果で鼻がムズムズする気がするから、マスクは着けたままでいくわね」

アダルト「にゃー」

茶和子、窓の外を見る。

茶和子「あ、あの青い屋根の家、山口さんの家・・・・・・・！！懐かしい！あの駄菓子屋、とっくの昔に潰れたのに・・・・・・・あ、小学校もまだある！」

アダルト「思い出したかにゃ？」

茶和子「んー、なんとなく。４０年前かあ。意外と覚えているものなのね」

駅員「記憶のドア開きまーす」

茶和子「え？」

駅員「ぷしゅー」

茶和子とアダルト、列車から降りる。

駅員、帽子を外す。

茶和子「ああ、風が気持ち良い。土と緑の匂いがする。変よね？こんなの、ただの空想、イマジナリーのはずなのに。ここは、ただの家の中のはずなのに・・・・・・そうね。東京に引っ越す前、私は、この町に住んでいたんだわ」

浦人「自然に囲まれた、何処にでもある様な田舎町で、私は、貴女に出逢いました」

茶和子「父と母と兄と・・・・・・そうだ。お祖父ちゃんもまだ、生きてた。でも、私が小学５年生の時に死んじゃって、それで、こんな田舎はもう嫌だ！って、お母さんが言い出して、引っ越さないなら離婚するって言って、お父さんと喧嘩して」

いつか、日記を読み上げる。

いつか「９月１３日日曜日。天気、晴れ。お父さんとお母さんから、

私とお兄ちゃんに、大事な話があると言われた。来年の４月、東京に引っ越そうと言われた。お祖父ちゃんが死んだから、もうここに居る必要がないと言われた。お兄ちゃんは喜んでいたけれど、私は、東京になんか、行きたくないと思った」

浦人「貴女は、一人で泣いていました。夜の河原で、誰にも気づかれない様に、ひっそりと」

茶和子「お父さんもお母さんもお兄ちゃんも、みんな嬉しそうだった。早く東京に行きたいって、ワクワクしてた。だから、言えなかった」

浦人「私は、直ぐに声をかけようとしました。しかし、それは出来ませんでした。僕、一人？お母さんは？と聞かれるのが、目に見えていたからです」

茶和子「あ」

いつか「９月１４日月曜日。曇り。五華（いつか）ちゃんから、どうしたの？と聞かれた。私は、何でもないよと言ったけど、嘘だと言われて、引っ越しの事を話した。五華ちゃんは、良かったねと言ったけど、私は、良くないよと、思わず泣いてしまった」

茶和子「いつか・・・・・五華ちゃん！」

いつか「仕方がないよ。私達、まだ子供なんだから」

浦人「冷たい風が吹きつける、冬の始まりの頃でした」

茶和子「五華ちゃんは、クラスで一番大人っぽくって、いつもみんなから少し離れた場所に居たっけ。なのに、困ってる人が居たら、直ぐに話しかけてに来てくれて。私、大好きだったな、五華ちゃんの事。なのに、言えなかったな。何で、ちゃんと言わなかったんだろう」

いつか「１０月５日月曜日。曇り。憧れの五華ちゃんと一緒に帰ってたら、河原で、鼻水を垂らした子猫を見つけた」

茶和子「あ」

いつか「ぴすーぴすーと鼻息を漏らして、目ヤニもいっぱいで、全体的に小汚かった。でも、小さくて可愛かった。私と五華ちゃんは、その子に、アダルトという名前を付けた」

茶和子「アダルト！」

アダルト「にゃー！」

浦人「貴女は、くしゃみをしながら、泣いていましたね」

茶和子「そうだった。それで、お母さんにアダルトを飼いたいって言

ったけど、あんたは猫アレルギーだから駄目だって言われて。
だから、五華ちゃんと河原に行くのが習慣になって、私、
五華ちゃんと仲良くなりたかったから、それが凄く嬉しくて」

浦人「毛玉がいっぱい付いた毛布を抱き締めて、何度も何度も、
くしゃみをして」

いつか「アダルト、もうすぐ死ぬよ」

茶和子「(子供に戻る)え?」

いつか「昔見た猫も、同じだったから分かる」

茶和子「そんな、じゃあ、病院に」

いつか「そんなお金ないでしょ」

茶和子「お母さんに頼めば」

いつか「出してくれるの?」

茶和子「・・・・・・無理だと思う。五華ちゃんちは」

いつか「うちの親も無理」

茶和子「・・・・・・うん」

浦人「もしかしたら、貴女にとって大切な誰かが、死んでしまった
のかもしれない。だから貴女は、ひとりぼっちで泣いている
のかもしれない。私は」

いつか「早く、大人になりたいな」

茶和子「大人?」

浦人「羨ましいと思った」

いつか「大人になったら、私と、茶和子と、アダルトと、3人で、好
きな所で、好きに暮らしてさ」

茶和子「!?一緒に住んでくれるの?」

浦人「貴女に泣いてもらえる誰かが、心底、羨ましいと思った」

いつか「いつか、きっと」

茶和子「うん!絶対そうしよう!私と、五華ちゃんと、アダルトの
3人で!お母さん達に反対されても反対し返して!私達だけ
の家で、私達だけの生活を」

いつか「無理だよ」

茶和子「え?」

浦人「妬ましいとも思った」

いつか「仕方がないよ。私達、まだ子供なんだから」

浦人「誰かの為に泣いてくれる優しい人が(子供に戻る)僕には、
居なかったから・・・・・・!!」

茶和子「五華ちゃん?」

浦人　「僕は待っていたんだ。僕が死んだ時、僕を想って泣いてくれる貴女の様な優しい人を、僕は、護りたかったんだ」

いつか「１１月２日月曜日。雨。昨日、五華ちゃんが、死んだ」

茶和子「え？」

いつか「と、先生に言われた。びっくりした。物凄く悲しかった。お母さんが、お父さんに、あの子は、虐待されて死んだと言っているのを聞いてしまった。虐待って、何だろうと思って調べたけど、よく分からなかった。いつかちゃんは、いじめられたから死んだの？いじめられたら人は、死ぬの？」

浦人　「僕だって、僕が死んでしまったらきっと、お母さんもお父さんも泣いてくれるって信じてた！だけどあの日」

茶和子「いつか・・・・・」

浦人　「五華お姉ちゃんが死んだあの日！お母さんもお父さんも、全然泣いてはくれなかった！バツの悪そうな顔をして、何死んでんだよ！？って、お父さんはお姉ちゃんを更に蹴った！お母さんも、どうしようどうしようって、半泣きだったけど、お姉ちゃんの為には泣かなかった！誰も・・・・・・僕も。これからは、僕がお姉ちゃんの代わりなんだって、僕も、お姉ちゃんの為には、泣けなかった・・・・・・」

茶和子、毛布を抱き締め、くしゃみをしつつ、泣く。

いつか「１１月２４日火曜日。曇り」

茶和子「（くしゃみをする）」

いつか「今日、アダルトが居なくなった。段ボールと毛布だけしかなかった。いっぱいいっぱい探したけど、何処にも居なかった。もしかしたら、アダルトも死んじゃったのかなと思って、泣いてしまった。そしたら、小さな男の子から」

浦人　「お姉ちゃん、大丈夫？」

いつか「と言われた」

茶和子「・・・・・大丈夫」

いつか「こんな夜遅くに、どうしたんだろうと思った。もしかしたら、これは夢なのかなと思った。うん。夢だ。これは、私の、夢」

浦人　「お姉ちゃん、あのね」

茶和子「（くしゃみをする）何？」

浦人　「僕、お姉ちゃん好き！僕、大人になったら、絶対に、お姉ち

やんと結婚する！」

茶和子「・・・・・え？（くしゃみをする）」

浦人「だから待ってて。僕、絶対にお姉ちゃんを護るから。今度こそ僕が、絶対に、お姉ちゃんを、護るから」

茶和子「（少し笑う）大人に、なったらね（くしゃみをする）」

浦人「！？うん！！」

茶和子、大人になり、いつか、浦人、アダルトと向き合う。

茶和子「五華、大人になったけど、大人って、貴女が夢見ていた程良いもんじゃないわよ？でも、貴女が夢見ていた以上に私、今、凄く楽しいわ！自由で楽しくて、ビールだって美味しくて。だけど、ちょっとだけ寂しくて・・・・・ここに貴女が居てくれたら、もっと最高だったんだろうなって、思わずにはいられないわ・・・・・でもね、この寂しさも、大人の醍醐味って奴なのよ？この味、貴女にも、味わってほしかったなあ・・・・・もちろん、アダルトにもね」

アダルト「にゃ？」

茶和子「ふふふ。でかーい」

アダルト「にゃー」

浦人「私も大きくなりましたよ！」

茶和子「え？」

浦人「私も！大人に！なりましたよーーーーーーー！！」

茶和子「えーーーーーーー！？」

全員、戦闘モードに入る。

浦人「ぬわっはっはっは！ぬわっはっはっはっは！」

茶和子「貴方、いつの間に」

浦人「さっきからずっと一緒に居ましたよ？」

茶和子「全く気づかなかった！」

いつか・アダルト「（飽きれる）」

浦人「さあ茶和子さん！私と結婚しましょう！」

茶和子「だから無理だって」

浦人「４０年前、私と貴女は、運命の出会いを果たしました！私には貴女が必要なんです！そして、貴女の弱さを知っているの

は、この世で私、一人だけなのです！」
茶和子「そんな事ないと思うけど」
浦人「うるせえ！黙って婚姻届けに判を押せ！！」
茶和子「何なのこの人？ア、アダルトー！」
アダルト「にゃー！」

アダルト、浦人に一撃。効果は抜群だ！

浦人「ぎゃー！！」
茶和子「ありがとう、アダルト」
アダルト「にゃ！」
茶和子「あら？」
浦人「くそ・・・・・猫のくせに生意気な・・・・・・」
茶和子「アダルトって、イマジナリー猫なのよね？」
アダルト「にゃー」
茶和子「イマジナリーって事は、私にしか視えていないって事・・・・・・なのに、どうしてあの人には、アダルトの攻撃が効いたの？」
浦人「私はもう、諦めない・・・・・・」
茶和子「まさか」
浦人「健やかなる時も、病める時も、喜びの時も、悲しみの時も、富める時も、貧しい時も」
茶和子「あの人も、私のイマジナリーフレンドなの！？」
浦人「茶和子さんを愛し、敬い、慰め合い、共に助け合い、この命ある限り真心を尽くす事を」
茶和子「やだ、私、どんだけ寂しい女なの」
浦人「誓いまーーーーーす！！！」
茶和子「きゃーーーー！！！」

アダルト、自動翻訳機（脚本）を手に取り、喋り出す。

アダルト「それは違うにゃ！」
茶和子「え？」
アダルト「そいつはイマジナリーフレンドじゃないにゃ！イマジナリーフレンドに限りなく近い何かにゃ！」
茶和子「そ、そうよね？こんな人、私知らないし。え？じゃあ、この人は、何？」

浦人　「最後に愛は勝つ・・・・・・」
茶和子「分からない。こんな時、都合良くその正体が、顔とかに書いてあれば良いのに！」
アダルト「そんなのどうだって良いにゃ！早くあいつを倒すにゃ！」
茶和子「え、どうやって？」
アダルト「アダルトは猫だから分からないにゃ！」
茶和子「確かに」
アダルト「でも茶和子はもう、大人だから分かるはずにゃ」
茶和子「いや、そんなに大人を買い被られても」
アダルト「それでも、茶和子はもう、立派な大人にゃ」
茶和子「大人」
いつか「茶和子」
茶和子「！？いつか」
いつか「（涙目で）早く、大人になりたいな」
浦人　「ひとりぼっちで泣かないでーーー！！！」

浦人、茶和子を襲おうとするが、聖なる剣によって弾かれる。

浦人　「ギャッ！？」
茶和子「大人・・・・・・ナめんなよ！？ヤッ！」

茶和子、いつの間にか、聖なる剣を構えている。

浦人　「そ、それは！？陰陽師に代々伝わる生き霊対策のお護り、返しの刀印護符、鎮宅〇〇霊符！が！貼られた！ライトセイバー！？何故そんなモノがこの家に！？」
茶和子「こんな時の為に、去年、ドン・キホーテで購入しておいたの」
アダルト「流石大人にゃ！」
浦人　「ば、馬鹿な！」
茶和子「備えあれば、憂いなし！ヤッ！」

茶和子、浦人に斬りかかる。浦人、避ける。戦闘開始。

浦人　「わ、私はただ、茶和子さんを、ひとりぼっちにしたくなくて」
茶和子「余計なお世話よ！」
浦人　「良い歳してイマジナリーフレンドだなんて」

茶和子「五月蠅い黙れ！ヤッ！」
浦人　「ひっ！そんな不思議ちゃんな茶和子さんも愛してます！」
茶和子「確かに私は寂しい女よ！？特別な人を作るのが怖いから、
イマジナリーフレンドを創って、一人で余生を過ごすと決めた！だけど本当は、ずっと一緒に居てくれる誰かと・・・・・・
急に死んでしまわない誰かと！ずっと、ずっとずっとずーっと！出逢いたかったのーーーー！！」
浦人　「だったら」
茶和子「でも貴方とは結婚しないわ！」
浦人　「何故！？」
茶和子「そんなの、貴方が全然、私の好みじゃないからよ！ヤッ！」

茶和子、浦人を斬る。

浦人　「ぎゃー！」
茶和子「あと、生理的に無理！ヤッ！」

茶和子、浦人を斬る。

浦人　「ぐあー！」
茶和子「てか不法侵入及び強姦未遂！立派な犯罪者じゃねーか！？
ヤッ！」

茶和子、浦人を斬る。

浦人　「良かれと思ってー！」
茶和子「何が良かれだ！？女、ナめんな！ヤッ！ヤッ！ヤッ！」

茶和子、浦人を斬る。

浦人　「何回斬るのぉ！？」
茶和子「お前が消えるまでだ！ヤッ！ヤッ！ヤッ！ヤッ！ヤッ！」

茶和子、浦人をメッタ刺し。

浦人　「ちょっとタンマタンマ」

茶和子「何よこの霊符、全然効かないじゃない」
浦人　「いや、効いてます。もうメッチャ効いてます。だから最後に
　　少しだけ、私の話を聞いてください」
茶和子「嫌ッ！」
浦人　「ヤッ！みたいに言わないで、あと剣も降ろして。あのですね
　　茶和子さん。私は、貴女の事が、ずっと心配だったんです」
茶和子「ヤッ」
浦人　「ヤッはもう良いですから。貴女があの町を去ってから約４０
　　年。私もすっかり大人になりました。それでも、貴女が毛布
　　を抱え、くしゃみをしながら泣いている姿だけは、まるで、
　　昨日の事の様に思い出せます」
茶和子「毛布？・・・・・・あ。貴方、もしかして」
浦人　「お久しぶりです。岩鶴浦人です」
茶和子「そっか。あの時の。夢じゃなかったのね？」
浦人　「そうです。現実です」
茶和子「大きくなったわね」
浦人　「茶和子さんも」
茶和子「そうね。お互い様ね」
浦人　「そうです。私達、無事に、大人になれたんです」

　茶和子と浦人、笑い合い、良い雰囲気になる。万歳三唱。
ウォーク、立ち上がり、歌い出す。

ウォーク「僕はいつでも見守っているよ
　良かったね　おめでとう
　出逢ってくれて　ありがとう
　僕はこれからも見守っているよ」

　茶和子、ウォークを黙らせて、電話にでる。

茶和子「ピッ。もしもしー？あ、お父さん？」
浦人　「あ、あれ携帯電話か」
茶和子「何？・・・・・岩鶴さん？誰？・・・・・・え、どうして
　今更そんな。引っ越したの、４０年も前で」

　茶和子、浦人を見る。浦人、気まずそうに目を逸らす。

茶和子「・・・・・うん。分かった。戸締りには気をつける。え?・・・・・・
（噴き出す）大丈夫だって。私、もう５２よ?もう子供じゃないんだから・・・・・うん。分かった。お父さんも元気で。何かあったら、直ぐに電話頂戴よ?うん。またね」

茶和子、溜息を吐く。

茶和子「岩鶴さん」
浦人「ごめんなさい」
茶和子「まだ何も言ってない」
浦人「ごめんなさい」
茶和子「どうして、うちに電話したの?」
浦人「東郷さんが町に戻ってると知って、もしかしたら、茶和子さんも居るかなーって思って」
茶和子「しかも、貴方、既婚者なんだって?」
浦人「ごめんなさい」
茶和子「子供も２人居るんだって?」
浦人「いやあ、どっちも凄く可愛くて」

茶和子、聖なる剣を構える。

浦人「ち、違います違います!不倫したくなったとかじゃなくて、茶和子さん、元気かなー?って思って。あ、うちの娘と息子、ちょうどあの時の貴女と私と同じ１２歳と5歳で、それで何か、胸にくるものがあったと言いますか、いや、本当に!嫁と出逢うまでは茶和子さん一筋だったんですよ!?てか私、本体じゃなくて生き霊ですからー!!残念!!はははは。生き霊ジョーク」
茶和子「ヤッ!」

茶和子、浦人にトドメの一撃。

浦人「ぎゃあああああ!!?」
茶和子「私の大人レベルは、５００９４３２６です」
浦人「Ｉ，ｌｌ　ｂｅ　ｂ」

茶和子「二度と来るな！」

茶和子、浦人を無理矢理追い出す。

茶和子「あー、疲れた」

茶和子、大の字で寝る。

アダルト、心配そうに茶和子に近寄る。

アダルト「にゃー」

茶和子「アダルト、心配してくれてるの？」

アダルト「にゃー」

茶和子「大丈夫よ。だって、私はもう、大人だから」

アダルト「にゃー！」

茶和子「あー、ビール飲みたい」

茶和子、ビールを飲む。

茶和子「かーっ！旨い！」

アダルト、いつか、ウォーク、ニッコリと笑う。

終わり。